

○ユキツバキの子房室数および胚珠数が多い傾向について (津山尚) Takasi
TUYAMA: On the pleuriloculate and pleuriovulate tendencies observed in
“Snow Camellias”

ヤブツバキにおいては、子房室は 3 室(稀に 4 室で)、各子房室中の胚珠は 3 個である。この胚珠数はマイクローム切片法およびルーペによる観察の結果である。ヤブツバキでは 3 個の中、上方の 1 個は大低の場合不稔化し、下方に左右に 2 個並んだものが稀る。

本誌 33 巻 9 号, p. 284 (1958) にユキツバキ系の園芸品種で子房が 5 室のものを珍らしいものとして報告したが、これは野生のユキツバキでは割合に普通に現われる傾向であることが判った。昨春 5 月富山市立堀川中学校の桐野豊秋氏に案内され、日本女子大学の学生福田美和子君と共に富山県の僧ヶ嶽でユキツバキを採集し、これを持って帰って花や胚の発生学的研究を初めた。この結果、多数の株から集めた標本であるのにも関わらず、マイクロームで福田君が調べた限りでは、8 個の子房中、5 室 2 例、4 室 6 例があった。また、1 子房室中の胚珠数は 5 個 2 例、4 個 4 例、3 個 3 例があった。4—5 個の場合は、子房室中で 1 個が最上部中央に、他は左右に 2 列に並んでいる。Sealy 氏の *Camellia* のモノグラフによると、常態として 5 個の種も 2, 3 あり、また胚珠が 1 子房室中に 5 個またはそれ以上ある種もあるので、ユキツバキの上記の特性が *Camellia* に新しい属性を加えたことにはならないが、多室と多胚珠を組合せてもつ場合の報告は或はないのではあるまいか。この 2 つの特性は一般に原始的なものとして認められていることは注意を要する。

これが僧ヶ嶽の採集地でのみの事実であるかどうかを桐野氏に聞き合わせた所が、富山県のユキツバキには「かなり一般的に多室のものがあり、胚珠も 6 個のものも見たように思う。」との返事があった。また「こういう性質がツバキ属の研究に重要なものとは思っていなかったの、今まであまり注意を払っていなかったから、今後統計的に研究したい」とのことであった。

(お茶の水女子大学)

□ Plumstead, E.P. **Fossil Floras of Antarctica: Trans-Antarctic Expedition 1955-1958**, Scientific Reports No. 9. pp. 154. pls. 28, London (1962) 英国のフクスとニュージーランドのヒラリーとの自動車での南極大陸の横断でえた化石の報告で、10 章から成る。化石の産地はウェッグル海に近い Theron 山系とロス海のマクマード湾を巡る山地、時代は下部泥盆から下部ジュラにわたる。刻明な記載と美しい写真が示すものは、これらの長年月を通じて南極大陸は陸地であり、亜熱帯のフロラがつゞき、主体は *Glossopteridae* でしかも南阿、印度と 70% をこえる共通群を持っていたという驚くべき事実である。著者はこれらを基にして南半球に新しい植物が発生し発達した後北半球に侵入してひろがるという新しい説を提唱する。被子植物もまた同じであって、*Glossopteridae* からの転身発展を頭に描いているように思われる。特殊だが系統学上は見逃がせない出版物といえる。(前川文夫)